

土岐川庄内川流域委員会

自然環境ワーキンググループの報告

- 1 . 開催日時 平成 16 年 6 月 17 日(木) 17:30 ~ 19:30
- 2 . 開催場所 名古屋都市センター 14 階 第 1・2 会議室
- 3 . 出席者 別紙のとおり
- 4 . 会議資料 第 4 回、第 5 回土岐川庄内川流域委員会資料より、環境に関わる箇所を抜粋

5 . 議事概要

学識者の方から、土岐川庄内川の環境に係る現状と課題について、主に次のような意見を頂きました。

駒田 名古屋女子大学教授（専門分野：魚介類）

- ・ 上流部は別として、庄内川は、都市河川としては魚の生息状況から見ると非常にいい川である。
- ・ きちんともう少し方向性が見出せていければ、名古屋のシンボルになる
- ・ 外来種の問題については、今のところそういう気配はない。
- ・ アユ等の遡上調査を現在実施している中では、(枇杷島付近では)調査日によって水位の変動が大きく、水位が低い日には魚にとってつらい状況になる。
- ・ 全川ではないが、アユがいるところの状況は、よその河川、長良川と比べても遜色ない。
- ・ 魚が上れるように下流から順番に環境を考える必要がある。中流域にアユの棲める領域をつくったからアユを放流しましょう、という話になるのは困る。

芹澤 愛知教育大学教授（専門分野：植物）

- ・ 庄内川は、都市河川としては多摩川、淀川に比べれば格段にりっぱな川である。
- ・ 河川敷は、一見よさそうですが大したものがなく貧相。矢作川、豊川に比べると植物は基本的に貧相。自然状態がよく残っていて希少種が集中するのは、河口部のヨシ原と古虎溪の溪谷部。
- ・ 植物が貧相なのは、ヤナギ林がないことが多分一番大きな原因だと思わ

- れる。河川敷が昔から非常に高度に人間に利用されてきたことに起因していると思う。
- ・ 上流部は、川の富栄養化が進んでいるせいだろうと思われるが、河川敷が礫の河原の状態がなくなり、河川敷に草本類、木本類がかなり茂るようになった。
 - ・ 基本的には都市河川としては非常にりっぱな河川であり、これから特に河口部と渓谷部分を大事にするとともに、中間部についてもヤナギ林を再生させて豊かな自然を取り戻していくというポテンシャルは十分にある。
 - ・ 生物の保全というのは、生息環境の保全であって、個々の生物の保全では決していない。
 - ・ アユとか BOD(生物化学的酸素要求量)とかいう自然環境の特定要素だけに注目すると、そこだけクリアすればいいという話になって、結局、自然のバランスが崩れ放しになりかねない。象徴的なものを選んで、それがいい状態になることはわかりやすいけれど、一方で非常に危険をはらむ。

八木 名古屋女子大学教授（専門分野：水環境）

- ・ 庄内川は、都市河川で限定すればきれいだが、愛知県を流れる他の河川、矢作川よりはかなり汚い。窒素、リンに関しては数倍高い。
- ・ 小里川と八田川が汚水源になっているのではないかと考える。
- ・ 小里川ダムは、かなりの過栄養になる可能性がある。小里川ダムで水が止まり貯水池となり、しかも浄水場になれば、川の水がきれいになる可能性もある。
- ・ 水質的に見て、BOD、COD(化学的酸素要求量)はかなり改善されてきているが、窒素、リンは改善されていない。
- ・ BOD は規制により改善されているが、工場排水の影響で COD が減っておらず、今後は TOC(全有機性炭素)で評価する必要がある。

土岐川庄内川流域委員会

自然環境ワーキンググループメンバー

	分野	氏名等	適用
学有 識識 者者	魚介類	駒田 格知 名古屋女子大学 教授	
	植 物	芹澤 俊介 愛知教育大学 教授	
	水環境	八木 明彦 名古屋女子大学 教授	
流域委員会委員	河 川 土砂水理学	辻本 哲郎 名古屋大学大学院 教授	議 長
	河 川 環境水理学	松尾 直規 中部大学 教授	
	生態系 鳥 類	小笠原 昭夫 愛知女子短期大学 講師	
	公募委員	小菅 俊洋 愛知県西枇杷島町 在住	
	環 境 市民活動団体	辻 淳夫 藤前干潟を守る会 代表	
	森林学 砂 防	寺本 和子 豊橋創造大学短期 大学部教授	欠 席